

武安
全集

学院图书馆
章



第三卷

武者小路實篤全集 第三卷

目 次

小さき世界・新らしき家

死

三

芳子

一八

西幸熊

三六

ペルシヤ人

三八

初恋

四三

小さき世界

六〇

姉

七九

新らしき家

八五

我孫子刊行会本

●第一集——日本武尊

日本武尊

一〇九

●第二集——雑感・第一集

序文のかはり

一四八

一夫一婦に就て

一四九

本気になつて書ける道

一五四

レンブラントの晩年の作

一五六

トルストイに就いて

一五八

トルストイの力(手紙)……………一六〇

夏目さんの手紙……………一六三

雑感「我」……………一六八

ある説教者 — 新らしい文学 — 書き損なひ — 創作も力だ — 文芸をやる人の

大胆 — 時代

三つの本能……………一七二

●第三集 — 不幸な男

序のかはり……………一七七

不幸な男……………一七九

或る日の出来事……………二〇四

拙著刊行会に就て……………二一四

●第四集 — 雑感・第二集

刊行会に就て……………二一五

運命に就ての雑感……………二一六

道德の力……………二二一

労働の義務……………二二四

合理的社会には……………二二六

合理的になる方が……………二二八

雑感「我2」……………二三一

噂 — 良心のない批評家 — 若い作家と反響 — 善を信しないもの — 真心

花咲爺に就て……………一三四

トルストイに就ていろ／＼……………一三五

トルストイの肖像 — 善と悪 — 人類的愛と現世的愛

ある人に……………一三九

●第五集 — AとB

序文のかはり……………二四三

AとB……………二四四

ある母……………二五九

ある父……………二六七

●第六集 — 雑感

序文のかはり……………二八三

文学者の一生……………二八三

雑感〔我3〕……………二八八

薦ちや心細いよ — 自分の実力は — 君の影響 — 文壇がこの頃

附録

ロダンの展覧会に就てのある風説を聞いて……………二九一

詩十八篇……………二九二

或人は俺を — 我が妻に — おゝ川よ、川よ — 火を — 芝居にて — さうし

て自分は勝つ — 天才は云つた — 女よ（女の無知を喜ぶ人の多いのを見て） — 先輩に

一俺は金だ — だが — 俺は安心だ — 批評家に — 彼等は — お前のかく

もの一 お前は天才か一 しやうがない奴一 僕から見ると

●第七集一 雑感

第七集のあとに……………二九七

ある父の手紙……………二九八

日記の一節……………三〇二

母としてのわが母……………三〇四

野島先生の夢……………三〇九

●第八集一 我孫子より

序文のかはり……………三二七

白樺美術館に就て……………三二八

手帳の内より……………三三二

読者一 詩人としての千家一 論争一 『ロダンの言葉』と『カラマゾフの兄

弟』一 自分に用が出来たら一 尊敬する作一 伝統主義でも

雑感〔我4〕……………三三六

後ちに来る者に……………三四一

●『後ちに来る者に』

自分の今後の道……………三四三

美術に就ての雑感……………三四五

手紙三つ……………三四九

類の愛 — 自分を厳肅にしてくれるもの — 厳肅な気分 — 他人に — 自分の神
經 — 自分は — この帝王氣質 — ニイチエ — 彼は — 自分の作品と輕蔑す
る人の作品 — 饒舌る人 — 時間よ — 何年か後 — 死後の光榮 — 物質に主義
者なくて — 人類の本能 — 創作家の天職 — 厳肅な所の皆無な作 — 西洋人に
は — 「少くも來年」 — 「最後の勝利」 — 「自分の光榮」 — 偉い人と本国 — 馬
鹿批評家 — 彼等の知らないことを一つ — ベートベンの伝記 — 夏だ — 生
きることは — 自分の頭 — 創作を — 自分は希望を — 小品の内にも — 「暫
くまで！」 — 仕事を重ねてゆくと — 眞の創作家 — 短かい目 — 他人のもの
— 何を要求されても — 何か書いてゐる時 — 嫂の死 — 「幕物」或る日の事「
に就て — 一言 — 語 — 氣輕に物を云ふ人 — 何にでも口を出す奴 — 世界の一員
になりつゝある — 國家の目から — トルストイが死刑を見た時 — 自分を導く
意志 — 平和協會の會長としての大隈伯 — 思想家 — 自分の一生を — 自分の
仕事と國家 — いくら余裕のない國でも — 余りに本当のこと — 文章について
苦心する人 — 自分の自覺を — 一個人だけの立場から — 「自分の作品が」 —
「人々に愛されてゐると思ふ時」 — 「有名にもならないのに」 — 「賞められて」 —
「書いて書いて」 — あまりに自分のことを — さう云ふ人々がなつかしい — よ
しそれ知つてゐても — 今度の戦争 — 平和の爲めの戦争(一) — 平和の爲の戦
争(二) — 「尊敬するのは夏目さんだけだ」 — 「執念深い敵」

有縁者と無縁者とに

讀者 — わが友 — レンブラント — 俺が立つてゐるのは — 君達 — 自分
が — 惡評と云ふものに就て — 一定評 — 忠告 — 「惡魔の子分」 — 滋養分

— 最も他人を罵詈した者

雑九種

四〇九

もし君がパリスだつたら — 時よ来い — 自由だ — 自由に裏切られるな — 今にひどい目に逢ふぞ — 勝つとか負けるとか — 非戦論者 — 春だ — 先祖

或る人は云つた

四一八

或人は云つた — 他人の不幸 — 人類は叫ぶよ — 返してはやらない — 之からは — 世界的の恐怖時代 — ほつたらかしておいても — 神の国は近づいた — 考へたくないこと — こんな風に — 人類に逢つた — 人種同士 — 国家以上の国 — 国家の爲には — 神のつくれる処 — 都合のいゝ神 — 本当の神様 — だから宗教は — 社会の制裁を利用して — 宗教家と借金 — 女と金の支配 — 自分

手紙四つ

四二四

確さと本当の事

四二九

確さ — 本当の事

八百人の死刑

四三二

偶然者の独言

四三四

芸術品に就て

四三七

自然と云ふ言葉

四三九

自分の創作する時の態度

四四〇

雑感（一九一五、六年）〔2〕

四四二

自分達の自己肯定 — その妹をかきつゝ — 金の世の中と文士 — くず — 盜賊 — お慰み — 或る人々は — なぜ彼は生長がとまつた — なぜ彼は進歩した — 他人と彼 — 今時に珍らしい — 待つてゐる — 美人 — 死 — 後 — この本能 — 武士の名を惜しむこと — 死 — 後 — 傲慢 — 暴君 — 自分は今 — そんなもの — 楽しさうに笑つた — 彼等は淋しさうだ — 淋しい人 — 稀代の良心 — 天 — 氣 — 呑氣な奴がある — 物好きな奴がある — 他人の内の自分 — 競争心 — 君の本 — 戦かうものと — 自分の良心 — 社会主義者 — 自分は — 撰ばれた人間 — 自分だとして — 牢屋 — 未来 — 私情的愛 — ある世界 — あはよくば — 自分は一生 — 然し自分は — 社会と文学 — 日本の社会 — 眞の作品を見ても — 「古狸」 — 明治維新の若者 — 埋草的 — 先づ青年を害して — 自覺の時 — 一人で — 牛刀をもつて — 眞面目になるのが恐ろしくなつた人 — 彼の氣持 — 何しても始まらないと思ふ人 — 成功 — 眞実にふれる唯一の道 — 自分に就て云へば — 自分の生活 — 夢でも — 自分の文章 — 芸術界の遊び人 — 詩人のあそび — 自分の本職 — ぬく時で — 眞面目になつても(再び) — 眞面目にならないではゐられない氣持 — なぜ馬鹿ものだけを — 自己に正直 — 裸の王様 — 自己をだます — ある新聞記者に — 氣がひけてゐる処に — 一人の嫌がること — 二倍の祝福 — 過去の罪 — ストリントベルヒの「父」 — 大きい仕事 — 「わしも知らない」上演に於て — 虫のいゝこと — 彼等は大勢で — 大きい自分と小さい自分 — 死 — 批評が嫌い — 傲慢 — 怒つてゐるな — 相手にしないよ — あの獅子 — 君のもの — まるでわからない — 自殺 — 愛 — 他人の愛の生活 — 輕卒な神の子 — 他人の死 — 自然はい

ろ／＼のものを一野狐禅一理想的なこと一芸術家として一「わしも知らない」を見て一批評に臆病一感心しない作品と一自分と現在一自国にのみ都合のいゝ真理一無くて叶はぬもの一セザンヌは画家だ一「キタナイ感じと清い感じ」一人類の火一お前の仕事一勝利の道一お前は空想家か一台湾の土人のこと一台湾の土人は一僕のかくもの一デュラーの画一すべて芸術品は一日本の文芸の未来一愛するものゝ悲哀一諸君はほめてくれるが一素質を一白樺以外に一気がきいた真似をするな一偶像破壊一或人は一世評一たへず一この頃一僕のを一小悪魔一「我等は何をなすべき乎」をよんで一同上一忍辱一今一步一いくらでも一君の理想的人物は一自己以上のもの一全力を一死よ一お前はどの頃一Aの迷信一立つた以上は一筆をとる以上は一生れた以上は一それ等の人心の美さ一道徳一同上一貴き空気

●雑感——「第一次世界大戦」から「新しき村」まで

●白樺「その他」

六号雑感「1」……………五〇七

人々はまだ一事実だけ一日本の文壇の為に一バツクの色一馬鹿族一まだゝ、まだゝ。今に、今に一俺の精神

手紙（千家元麿兄に）……………五〇九

雑談……………五一〇

執着及び其他……………五一八

面白いこと一執念深い一彼等一自分だつて一得意一大家一愛

されること — もう一步 — 自分の作

かうよ〔1〕……………五二一

Giovanni Heitaro — あまりに予定通り

かうよ〔2〕……………五二五

僕の立場と三井甲之氏の立場

手紙の内より……………五二八

六号雑感〔2〕……………五二九

雑感（自称批評家に就て）……………五三二

三十歳迄の耶蘇……………五三四

手紙一つ……………五三五

齒の療治に際しての雑感……………五三七

労働に就て……………五三九

手紙……………五四〇

雑感〔3〕……………五四二

自分の肯定 — 自分のかくものと自分 — 自分の内からの要求で — 泣きながら

も — 自分を自分の思ふ通りの — こつちを馬鹿にするもの — 日本武尊をかい

て — 大きな真拔さ — 自分の逢つた人は — ロダンの言葉

雑感〔4〕……………五四九

材料 — ある批評家が — 何を見ても — いゝものをかけば — 或人の評に答

ふ — 不自然なもの — 金の為に — 夏目さんの死にぎは — 或る人の説教 —
大きな仕事をするのに — 先輩らしいことを — 或る青年の夢について — 自分
のかくものに — 材料は — 自分から洗礼

雑感〔5〕……………五五五

チントレットよ — 或る本の序 — 予言者の声 — 海は静かゝも知らない — 流
行児 — 自分の芸術 — 理想的 — 生長する人間と生長しない人間の言葉 — 露
骨な改宗者 — 自分が進歩してゐる時は — 文学の仕事 — 日本現代文学の米沢
に就て — プサンとドメニキノ — 材料に〔作家より〕

雑感〔6〕……………五六九

小品九つ……………五七二

魚 — 蛇 — 燕 — 銀杏の実 — 噴きぬきの井戸 — 芝 — 燕の子 — 一疋の蜻

蛉の毒殺 — 河鹿

雑感〔7〕……………五八一

美術館をつくる計画に就て……………五八九

日記のかはり……………五九一

いろ／＼……………六〇二

ある旅人 — ある川 — 甲と乙 — ある獅子と狐 — ある猫 — 嵐 — 親友と
親友 — 善人 — 自分達で — 何がやりたいのだ — 自分達の意志 — 自分は
戦ふものだ — そを疑ふものよ — 自分達は — 人類そのもの — 英雄崇拜 —
小さき同情 — 仮面をとれば — 戦争は — 俺は — 俺は好んで — 俺は利口

だ一友 達一 皆の助力一 俺を強がりのやうに云ふ人がゐる一 自分の脚本
一 何をかいても一 米国の一将軍一 展覧会などに行つて一 僕はもう一
歩だ一 カラマゾフ兄弟一 一人で一 自分達に力がないと云ふことを恥ぢやう
一 俺の内には一 信用してくれ一 死んでも一 天才一 精神主義か一 今度
は、今度は一 大きな河一 三十三歳の子供

落 撰

手紙一つ（新らしき生活への道の追加）

六号雑記〔1〕

僕は意志の人間一 新らしい世界を一 自称神仏一 自分の人気一 田舎の眞面

目な若い人

新らしき村に就て

小品三つ

母の貞操一 妻よりの第一の手紙一 自分の逢つた人々

雑四つ

脳貧血一 ある教育家、小説家は恐ろしい一 彼は一 若い男の手紙

●新聞その他

秋田雨雀君に

中村孤月氏へ

生きてゐる間

生田長江氏に戦を宣せられて一寸

六二五

六二六

六二七

六二八

六二九

六三〇

六三一

六三二

六三三

六三四

六三五

六三六

六三七

六三八

六三九

六四〇

六四一

六四二

六四三

六四四

六四五

雑感〔8〕	六四八
岸田劉生画会主意書	六五一
白樺の展覧会に就て	六五一
手紙の内より	六五四
「人道主義」に就て	六五七
神経はなか／＼暴君（志賀直哉氏の印象）	六五八
本当のことの分る男（長与善郎氏の印象）	六五九
Sの叔父さんの話	六六一
旧い日記の内より（小説には非ず）	六六二
●「編輯室にて」その他	
編輯室にて〔1・大正三年三月号〕	六六五
蛇 足〔大正三年三月号〕	六六六
編輯室にて〔2・大正三年四月号〕	六六九
雑〔大正三年五月号〕	六七一
編輯室にて〔3・大正三年六月号〕	六七二
編輯室にて〔4・大正三年七月号〕	六七二
寄贈書籍〔大正三年七月号〕	六七三
ユドイツ 吹田蘆風氏訳 南江堂	
編輯室にて〔5・大正三年八月号〕	六七三